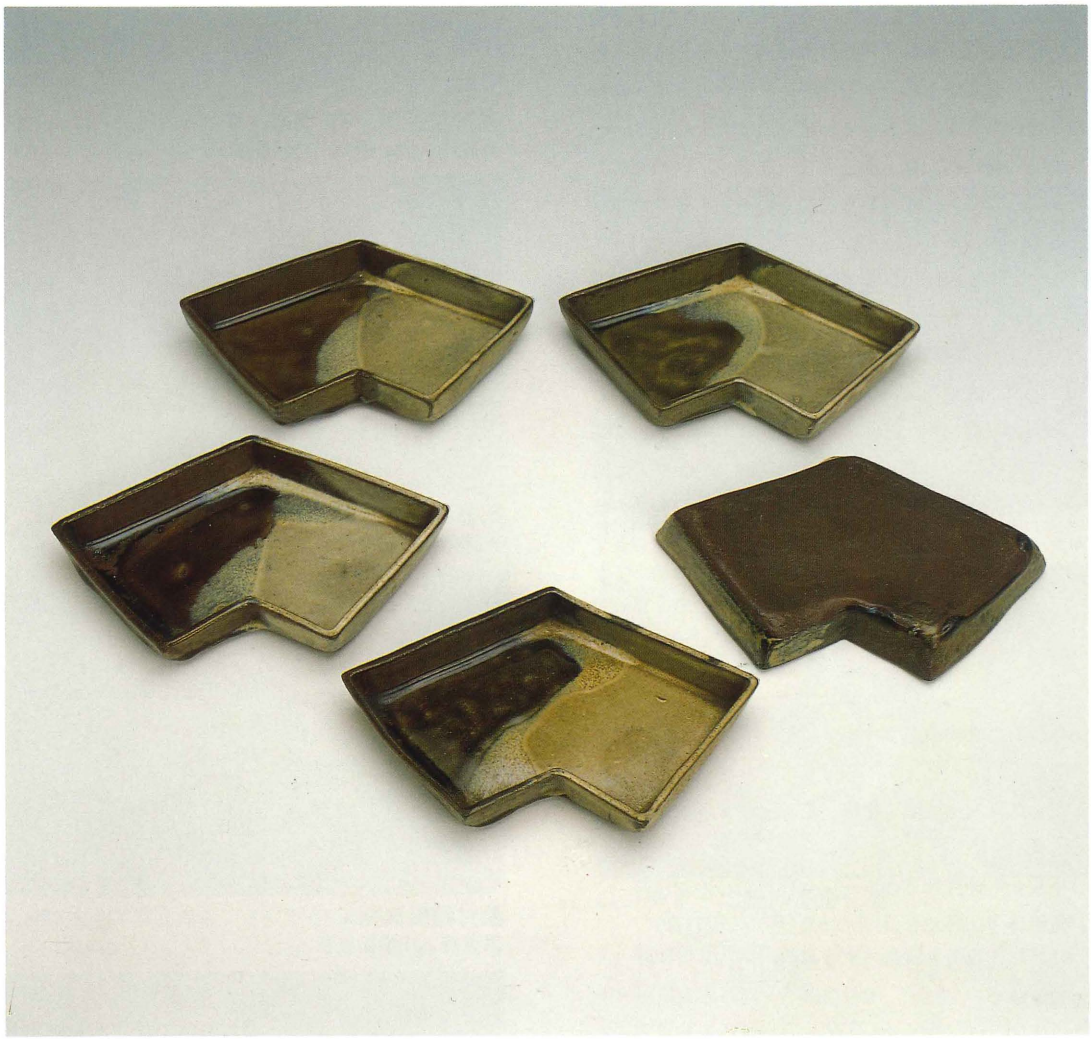
セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

25

編　集　1992.3.30
発　行　佐賀県立九州陶磁文化館
代表者　田　中　猛　善
〒844 佐賀県西松浦郡有田町中部乙3100-1
電話 0955—43—3681
印刷所　山口印刷株式会社
佐賀県伊万里市二里町大里乙3617-5



掛分釉結文向付（かけわけゆうむすびふみむこうづけ）

館蔵資料

筑前・高取焼・内ヶ磯窯
17世紀前半
口径19.0×10.4cm　高さ2.7cm　底径16.7×9.0cm

型によって結文形に成形された向付である。器内・側面に藁灰釉と飴釉を掛け分け、底部は平底で無釉となる。縁を立ち上がらせた器形といい、掛け分けの釉技といい、なかなかに洒落た意匠となっている。高取・内ヶ磯窯跡（福岡県・直方市）から同形の陶片が出土している。なお同形品で底部に三足の付く伝世品も知られている。

特別企画展のお知らせ
平成４年度特別企画
「福岡の陶磁」展

○主旨

佐賀県立九州陶磁文化館は九州各地のやきものの歴史とその特質をシリーズで紹介してまいります。今回は「福岡の陶磁」をとりあげました。

福岡の陶磁は文禄・慶長の役（壬辰・丁酉の倭乱）を契機として大きく発展しました。豊前上野焼や筑前高取焼などがその代表的なものです。

以来、小石原焼（朝倉郡小石原村）、須恵焼（粕屋郡須恵町）、釈形焼（八女郡黒木町）、星野焼（八女郡星野村）、柳原焼（久留米市）、朝妻焼（久留米市）、二川焼（三池郡高田町）、赤坂焼（筑後市羽犬塚）、一の瀬焼（朝日焼・浮羽町）、蒲池焼（柳河焼・柳川市）など数多くのやきものが江戸時代に焼かれました。

この展覧会ではこれらの「福岡の陶磁」の名品の数々を一堂に紹介し、またこれまであまりよく知られていなかった諸窯の作品をも体系的にとりあげて、それぞれの歴史と特質を紹介するものです。

○主催

佐賀県立九州陶磁文化館

○会場

佐賀県立九州陶磁文化館　第１・第２・第３展示室

○会期

平成４年10月10日(土)～11月15日(日)の32日間

休館日　10月12日(月)・19日(月)・26日(月)

　　11月２日(月)・９日(月)

○観覧料

大　人　510円（410円）　※(　)内は20名以上の

大学生　250円（150円）　　団体

小学・中学・高校生は無料

○図録

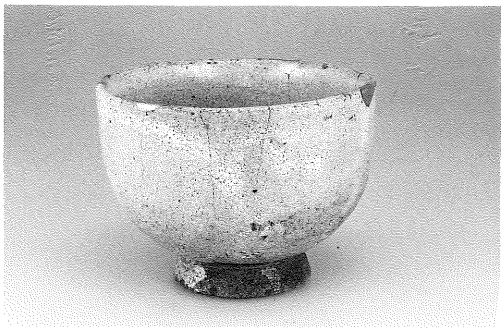
展示品の図録を刊行する。

○鑑賞会

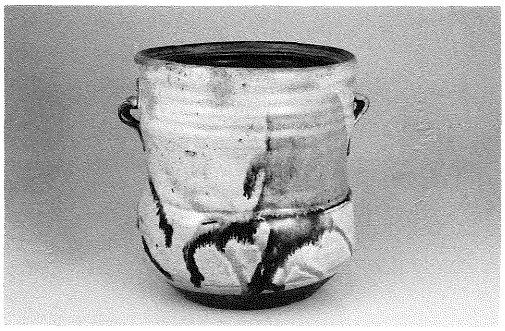
講師の解説による作品の鑑賞会を会期中に行う。

○記念茶会

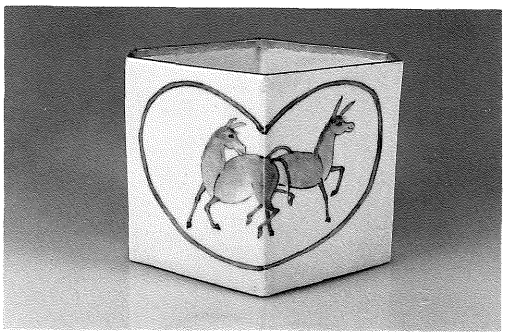
会期中に行う。



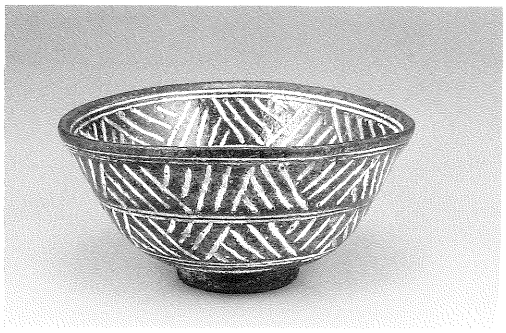
藁灰釉茶碗　銘「玄峯」
高取焼・内ヶ磯窯　17世紀前半



三彩釉胴締水指
上野焼・上野皿山本窯　19世紀初頭



染付菱馬水指
須恵焼　18世紀後半



彫三島茶碗
柳原焼　19世紀前半

特別企画

現代イタリア陶芸展

平成４年８月29日から10月４日まで、ファエンツァ国際陶芸博物館の所蔵品を中心にした「現代イタリア陶芸展」を開催します。また当館に続いて滋賀県の「陶芸の森」と岐阜県の「セラトピア土岐」でも開かれます。

３月16日から23日まで、この展覧会の準備のためイタリアへ出張しました。メンバーは田中猛善館長、乾由明先生、文化課の永松和久係長、それに私の４名です。16日の夕方にミラノへ着きましたが、当展のコンサルタントをしていただいているファエンツァ市在住の陶芸家平井智さんが出迎えてくれました。翌日陶芸の町ファエンツァへ車で移動しました。ミラノからは約250kmの距離です。ファエンツァのホテルには市の文化担当官のクレパルディさんと、ファエンツァ国際陶芸展事務局長のゲッティさんが私達を待っており、再会を喜び合いました。

ファエンツァ国際陶芸博物館

遅い昼食を終えたら、さっそく国際陶芸博物館へ移り、展覧会の合意書や出品内容について協議しました。ボヤーニ館長を中心にして内容を詰めてゆきましたが、1950年代から1991年までのイタリア陶芸をこのように一堂に紹介するのは、イタリアでもまだないとのこと。３月18日には市庁舎を訪ねて、ボスケリーニ市長と田中館長による調印式が行われました。地元の新聞記者も数人来ており、翌日調印の様子が新聞で大きく紹介されました。展覧会の出品候補の作品を収蔵庫で見ましたが、さまざまの表現のものがあり、新しい作品ほど複雑な形のものが多く、梱包や取り扱いに万全の配慮をしなければなりません。打ち合わせが一段落した後、展示室を少しのぞきましたが、時間がなくてとても見切れません。15、６世紀のマジョリカ陶器の発掘陶片がずらりと並べてあったのが印象に残りました。ファエンツァ国際陶芸博物館は1908年に設立され、古陶磁や現代陶芸の膨大な量のコレクションがあります。また市内には優れた陶芸家が多数居住し、ヨーロッパ陶芸のメッカと言われています。陶芸家のアトリエを４ヶ所回りましたが、それぞれに個性的で、有田の陶芸とは異質な面を感じました。こうした刺激的な作品が日本でどのように評価されるか楽しみです。

（鈴田由紀夫）

市庁での調印式

ロンティーニ氏の工房にて

1．佐賀県立九州陶磁文化館　平成４年８月29日（土）～10月４日（日）　月曜日休館

2．滋賀県立陶芸の森　平成４年10月10日（土）～11月23日（月）　月曜日休館

3．産業文化振興センター　セラトピア土岐　平成５年１月22日（金）～２月21日（日）

観覧料（九州陶磁文化館の場合）

大人510円（410円）　大学生250円（150円）　高校・中学・小学生は無料

出品数

陶芸家90名による作品120点

〈速　報〉

窯壁の岩石学的研究
― 焼成回数推定への試み ―

窯跡遺跡を研究する際の大きな問題のひとつとして、その窯跡が果して実際に何回くらい焼成されたのかということが挙げられるであろう。これを知るには、従来窯壁の層位的な剝離状況等を調べ、焼成回数や壁体の整形回数を推定する方法が試みられているが、この方法では、肉眼観察にのみ依存しているため、それが実際の窯跡の利用回数と必ずしも一致するという保証は少ない。これに対し筆者らは、その窯跡の窯壁部分を岩石学的に調べることによって、窯の利用回数を直接推定することを今回試みたので、ここに報告する。

一度窯を利用すると、その際に、高温で溶解した物質が側壁に付着することが知られている。このため、何度も繰り返し利用された窯の側壁では、厚さ数センチ程度の付着物が、層を成しながら窯壁を覆っているのが観察される。そこで、これを顕微鏡で観察して付着物の層の枚数を数えることによって、実際に窯が利用された回数を求めようというのが今回の試みである。

観察を行ったのは、佐賀県有田町のムクロ谷窯跡で、ここは、1680年代から1740年代に至るまで利用されていたことが知られている。試みに、第一室の窯壁から付着物試料の提供を受けた。試料は、肉眼的にもいくつかの層を成して折り重なっていることが確認できる。これを、層に垂直になるように注意しながら、岩石薄片と全く同じようにしてプレパラートにし、岩石用の偏光顕微鏡によって観察を行った。その偏光顕微鏡写真を右図に示す。写真から明らかなように、付着物中には、厚さ0.3ミリ程度の層が、十数枚程度重なりあっているのが確認できる。この一枚一枚の層が、窯の一度の利用を示すものだとすれば、この窯は十数回程度利用されたと推定することができる。

残念ながら今回の試料では、高温によって付着物がバルブ状に弾けているような部分があるため、厳密に層の枚数を数えるのは困難であった。また、一つ一つの層の持つ性格が解明されてないため、何処から何処までを一度の利用でできたものと捉えるかの基準が、現在の所いま一つ不明確な状態である。しかし、今後この様な視点で、観察を続けることによって基準データの作成が可能であり、今後の窯業史の研究に大きく寄与することができるようになると期待するものである。（東京国立文化財研究所　朽津信明・三輪嘉六）

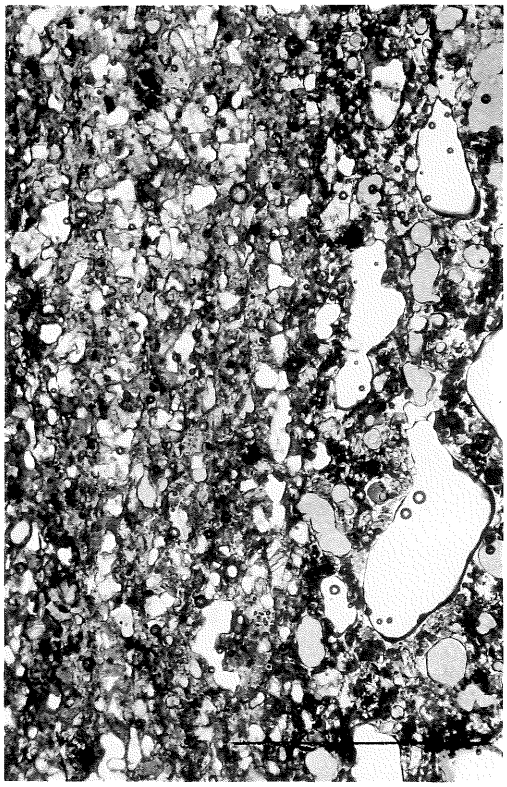


図　窯壁付着物の偏光顕微鏡写真
オープンニコル
図中の―は1㎜
十数枚の層が確認できる

（なお、試料は有田町教育委員会より提供）

行事・展覧会スナップ

青少年科学活動促進事業 焼物科学教室

佐賀県青少年科学活動促進事業は、文部省の補助事業として昭和62年から実施しているもので、昆虫・植物など8コースのうち、当館が会場となった焼物コースには小学4年生の近藤阿沙美さんをはじめ8名が参加しました。平成3年6月16日の合同開講式を皮切りに、各地で実施され、焼物教室では8月19日～30日までの間に計6回（48時間）、焼物の基礎的学習や実際の焼物の制作などを行い、楽しく勉強しました。

実習風景

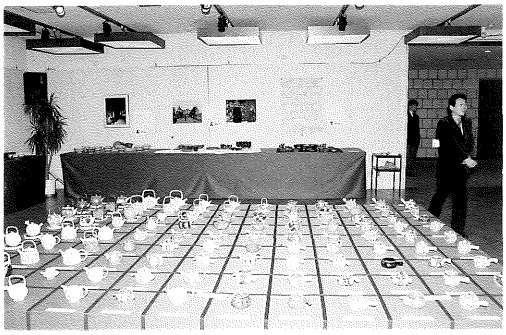
陶芸文化講座

平成4年3月7日に、当館講堂において陶芸文化講座を開催しました。今回は京都国立近代美術館・主任研究官、福永重樹氏に「現代の陶芸」と題して講演していただきました。主に関西地方で活躍している若手陶芸家の作品スライド約400枚をまじえ、現代の陶芸について熱っぽく講演され、約150名の聴講者も熱心に話に聞き入っていました。

会場風景

第1回吉田窯友会展

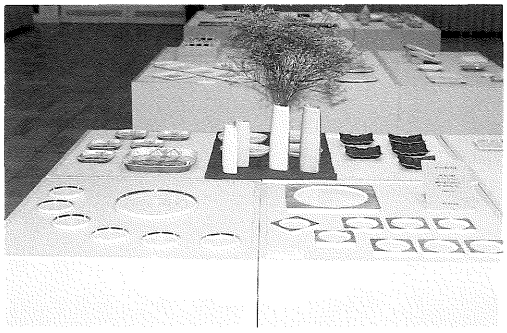
平成4年2月18日から2月23日まで、第1展示室において、第1回嬉野吉田窯友会展が開催されました。窯友会は嬉野町吉田の肥前焼窯元協同組合青年部が組織した研究会で、日頃の活動の成果を発表すべく、今回の展覧会となりました。テーマは“土瓶と急須”で、会員11社の急須類216点と、各会員の食器類約330点が展示されました。



展示風景

第3回九州陶磁器デザイナー協会展

平成4年2月25日から3月1日まで、第1展示室において、第3回九州陶磁器デザイナー協会（DAKT）展が開催されました。今回のテーマは「板・盤・PLATE」で、板状のもの、板による構成など、板の概念をできるだけふくらませた“もの作り”の提案です。会員の提案した食器や照明具、時計、オブジェなどの作品約320点が展示されました。



展示風景

第６回有田窯業大学校卒業制作展

平成４年３月３日から３月８日まで、第１展示室および展示ホール、エントランスホールにおいて第６回佐賀県立有田窯業大学校卒業制作展が開催されました。本科、研究科の卒業生21名の作品・研究と、短期研修生（下絵付、上絵付、一般ロクロ、特別ロクロ研修）の作品が展示されました。本科生・研究生の作品は食器を中心に、時計や照明器具、人形やオブジェ、釉薬のテストピースなど幅広い提案がなされ、観覧者の高い関心を呼んでいました。また卒業生は、県内だけでなく県外各地へも就職が決まり、若い窯業後継者としての期待も高まっています。

展示風景

展示風景

創立20周年記念　青墨会展

平成４年３月10日から３月15日まで、第１展示室において青墨会20周年記念展が開催されました。この展覧会は、磁器の絵付けを永年手がけられ、また絵付け技術の指導もされてこられた金武一二氏を会長とする青墨会の会員の作品展です。

会長の金武氏は、また水墨画にも並々ならぬ画才を示され、特に山水は秀逸であると言われており、今回は青墨会が創立20周年を迎え、また金武氏が80歳を迎えるにあたり、記念として行われたものです。

会員の方々が絵付けされた染付や色絵の壺や皿、陶額をはじめ、水墨画の掛幅や扁額、巻子、屏風など約150点が展示されました。

第７回有田陶交会展

平成４年３月17日から３月22日まで、第１展示室において、第７回有田陶交会展が開催されました。今回のテーマは「肥前有田におもふ―柴田コレクションによせて」ということで、陶交会メンバーの窯元30社が提案した数々の作品が展示されました。関連催事として、３月20日・22日に協賛茶会が催され、また３月17日から21日まで、「食の体験」と称して、今回のテーマにそって提案された食器を使用した和風料理の試食会も行われました。

展示風景

シリーズ
やきものにみる文様 (22)
霞（かすみ）　文　様

「桜　桜　やよいの空は　見渡すかぎり　霞か雲か　においぞいずる　いざやいざや　見に行かむ」　幼い頃に口ずさんだこの曲は箏曲のひとつにして作曲者不明という。明治年間に文部省が歌詞をつけてひろめた。この写真にみる壺の図柄は桜の花に霞を配したもので、この歌にピッタリのものである。

霞は空気中に広がった微細な水滴やちりが原因で、空や遠景がぼんやりする現象。また、霧や煙がある高さにただよって、薄い帯のように見える現象。

大和絵で時間的経過、場面の転換、空間の奥行きなどを示すために描かれる雲形の色面で、その形式も時代によって変る。

平安時代には霞自体の定まった形体はみせないが、鎌倉時代に入ると、次第に輪郭の明瞭な特定の形体をとり始め、横楕円形や、上下辺を横長く水平に引き、頭部をまるくし、他端はやはり曲線でくくるか淡くぼかす。さらに頭部を長く突出させた「すやり霞（かすみ）」と呼ばれる形体、また孤線を連続させた雲形などが形式化していった。

近世に入ると、金色の霞や雲の中に盛り上げの手法で種々の文様を表わし、装飾性はいっそう強くなった。

（吉永　陽三）

色絵桜花文壺
有田皿山・17世紀後半　館蔵

シリーズ
やきものの技法 (22)
掛分（かけわ）け

釉薬の掛け方の技法名であり、色の違う釉薬を掛け分けること。釉薬は本来素地の表面を硝子質の物質で被うことにより、やきものを丈夫にし表面に光沢と色彩を与える。この基本的な機能をさらに装飾の面で高め、釉薬の掛け方で変化をつけたり、色の違う釉薬を組み合わせたりする。通常掛分けという場合は、2種類の釉薬が用いられている。掛け方は半分ずつ掛ける場合と、どちらかの釉薬を少なく付加的に掛ける場合がある。また柄杓で文様を描くように掛ける方法もあり、緑釉と褐釉の二彩唐津の様な例がある。また三彩は掛分けの技法でありながら、掛分けと呼ばずに通常は単に三彩と呼ぶ。

掛分釉沓茶碗　高取焼・内ヶ磯窯
17世紀前半　館蔵

釉薬を掛け分けるとき、浸し掛けにより半々に施釉すると片身替わりになる。皿類に多く、最も掛分けという名前に相応しい。上野（あがの）焼の皿で褐釉と藁灰釉を掛け分けたものがある。高取（たかとり）焼にもこの組み合わせの作品がある。写真の沓茶碗（くつちゃわん）は17世紀前半の高取焼であり、藁灰釉の白と褐釉の対比が特徴となっている。この茶碗は2種の釉薬が左右に掛け分けられているが、上下に掛け分ける場合も多い。唐津焼でいう朝鮮唐津は、この上下の掛分けのタイプである。釉薬の組み合わせは藁灰釉と褐釉であるが、上下であるため上の釉薬が下にのぎ目状に流れ落ち、独特の装飾的効果が生まれる。

掛分けは釉薬の色の区画で装飾するだけでなく、透明釉を用いる場合は、文様と組み合わせて効果を上げる。その好例が織部である。鉄絵の具で文様を描き、その上から透明釉を掛ける。その周辺に緑釉を掛けて彩りを添える。

（鈴田由紀夫）

陶磁資料寄贈者芳名（敬称略）

〔平成３年４月１日～４年３月31日〕

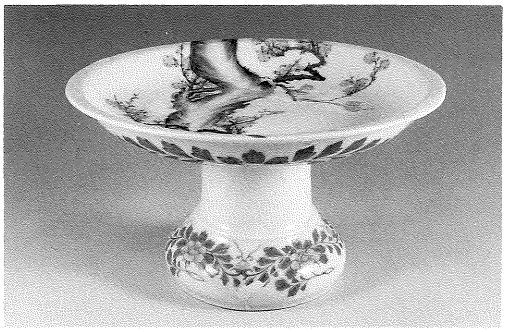
九州陶磁文化館に資料をご寄贈いただきましてありがとうございました。ご寄贈いただきました資料は、永く保存すると共に、研究・展示等に供したいと存じます。今後とも、ご協力をお願い申し上げます。

ご寄贈いただきました資料は、新収蔵品展（平成４年５月19日～５月31日）に展示し、広く県民の皆様にご高覧いただく予定です。なお、柴田明彦・祐子ご夫妻からご寄贈いただいた資料は、柴田コレクション展（Ⅱ）で、公開・展示いたしました。

工藤吉郎　東京都　色絵鳳凰唐草文鉢
中島政利　佐賀県　海軍食器・碗、陸軍食品・鉢、陸軍食器・小鉢、陸軍食器・鉢
泉　　満　福岡県　染付金錆釉蝶葦文蓋付碗
砂川　哲　東京都　染付陽刻藤文藤花形皿
富樫次男　秋田県　染付牡丹文輪花皿、染付梅樹文隅入角皿、白磁陽刻松竹梅文輪花皿、白磁雪輪形皿、染付花鳥文輪花皿
井上俊一　福岡県　錫白泥華紫銀彩器、錫白銀彩面取壺
山崎隆生　福岡県　色絵印判手仙境図皿
柴田明彦　東京都　染付波兎文皿など計208件
柴田祐子
江口　茂　神奈川県　色絵柘榴牡丹文輪形水注
藤井朱明　佐賀県　染付流氷文花瓶
田中一晃　佐賀県　青磁十字花文陶筥
小橋一朗　埼玉県　色絵宝文輪花小皿、色絵唐花文猪口
倉重末廣　佐賀県　染付梅樹文高杯
鍋島シツ　福岡県　染付菊桔梗文蓋物、染付唐子文蓋付碗、染付海老詩句文桶形鉢、染付鳳凰虫文蓋付碗、染付水草文碗、染付根引松文皿、色絵鮎文小鉢、釉下彩牡丹文盃、鉄絵屋号入瓶
野田敏雄　福岡県　釉下彩梅樹鳥文蓋付碗
工藤恭久　福岡県　鉄絵銘入徳利（亀山八木銘）、鉄絵銘入徳利（下村米彦銘）

染付金錆釉蝶葦文蓋付碗
平戸・三川内焼　19世紀前半　泉氏贈

色絵柘榴牡丹文輪形水注
有田皿山　18世紀前半　江口氏贈



染付梅樹文高杯
鍋島藩窯　19世紀前半　倉重氏贈

利　用　案　内

開　館　午前９時～午後４時30分　月曜休館　年末年始(12月28日～１月４日)休館
観覧料　一般200円（150円）／大学・高校生150円(100円）／中・小学生70円（50円）／( )内は20人以上の団体料金。但し、特別企画展の場合は、その都度に定めます。
交　通　佐世保線有田駅下車徒歩10分

※４月１日から小・中・高校生は無料